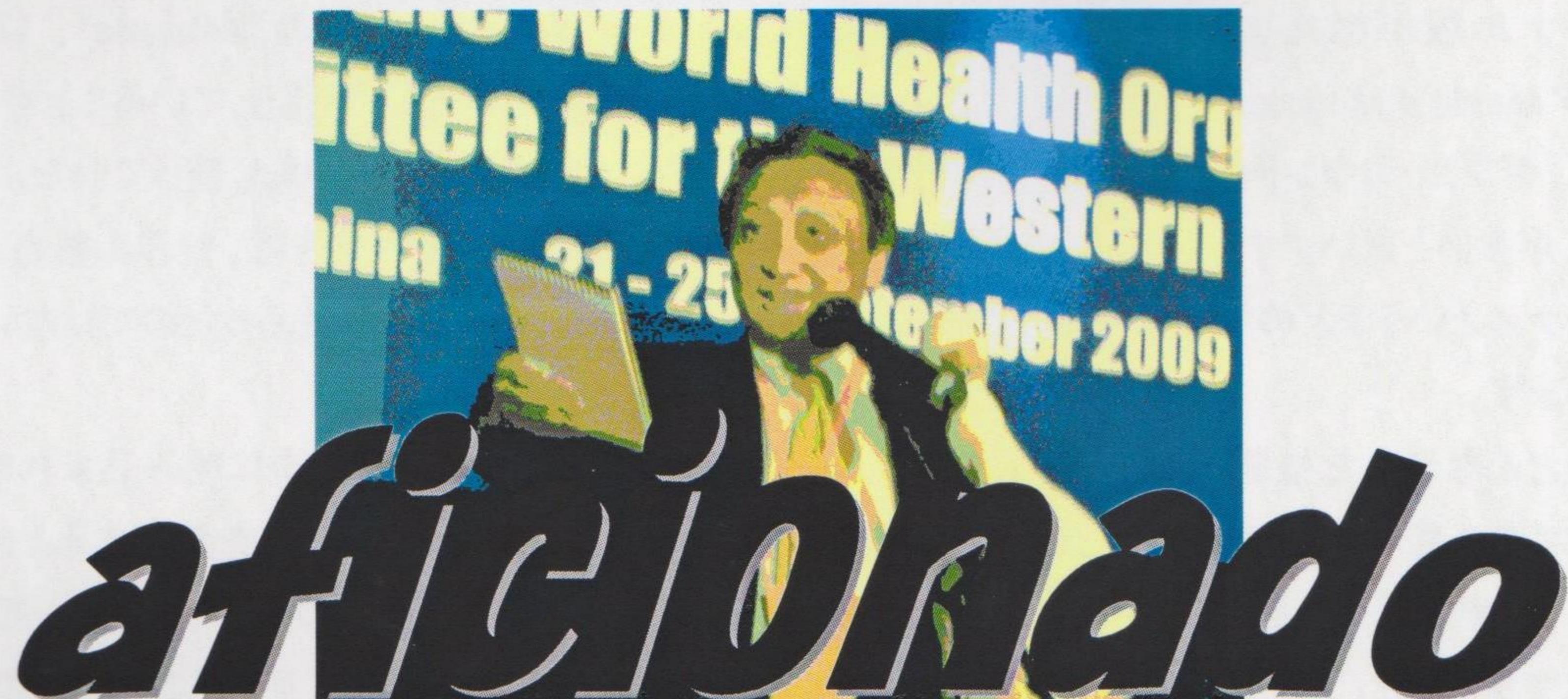


カード・マジック専門誌



edited by dr. masato mugitani  
vol.6-no.8

## ダブル・カウント

麦谷眞里

(まえがき)ダブル・カウントと聞いてすぐに何のことだかわかった人は、相当なカード・マニアです。オリジナルは、1953年に Norm Osborn と Edward Marlo の共著で出された"UNLIMITED"という小冊子で解説されたものです。この小冊子は1983年に Jon Racherbaumer が編集に参加して再版され、さらに、2002年、Jon Racherbaumer が再度手を加えて、"UNLIMITED 3.0"として刊行されました(写真1013:左が1983年版、右が2002年版)。

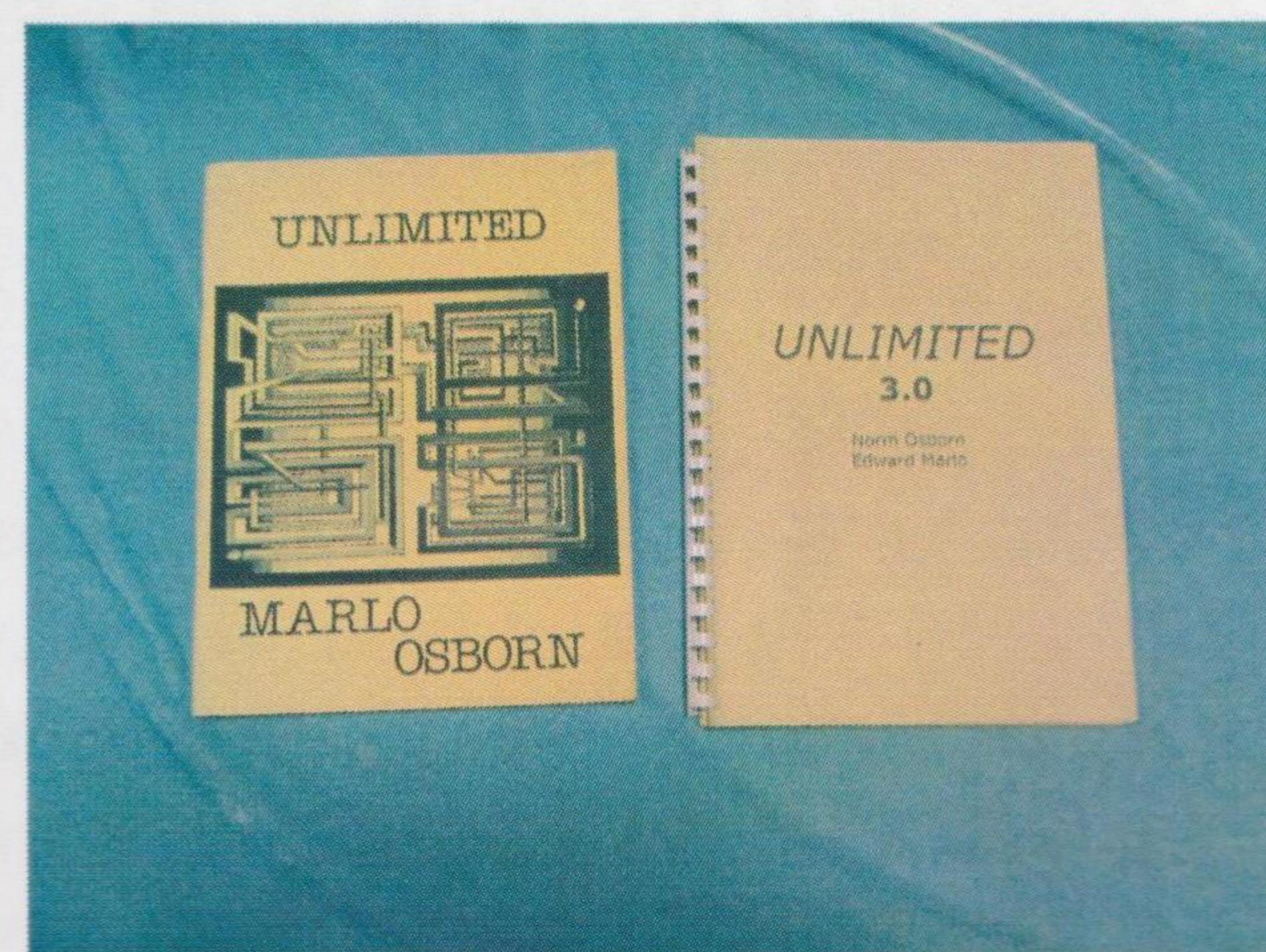


写真1013

同じ本を改定しながら3回目も出したところに、Jon Racherbaumer のこの技法に対する評価が見てとれます。Racherbaumer が新たに編集した「3.0」の良い点は、過去の他の文献や、特にオリジナル版が出た後の、1971年の“Hierophant 5-6”や、1972年の“Kabbala”、1976年の“Marlo's Magazine Volume 1”などの参考箇所を詳しく図みコラムで追記していることです。

ダブル・カウントの基本原理を説明すると、そんなこと昔から知っていたし使っていたよ、という人が多いと思います。ただ、1953年に Norm Osborn が思いついたときは、たぶん彼自身もオリジナルというほどの自信がなかったので Ed Marlo にオーソライズしてもらったのではないかと思います。

どんな優れた技法や原理もそれだけでは成り立ち得ないので、手順の中に組み込まれて活用されてこそ意味があります。以後のマジシャンたちは、この技法を使った作品を発表するときは、「ノーム・オズボーンのダブル・カウントを使って」と書いていますから、エドワード・マーローの功績は大です。ただ、フランク・ガルシアだけは、オズボーンにもマーローにも言及することなく、この技法を使ったギャンブリング・トリックを発表しています。

## 1. 原理

ダブル・カウントというのは、1枚のダブル・フェイス・カードの異なる面をそれぞれ観客に見せて、1枚のカードを2回数えることから来ています。それだけです。

### [実際のハンドリング]

①説明の都合上、ダブル・フェイス・カードを♦Q/♥9であったとします。デックから、♦Qと♥9以外の任意の4枚のカードを取り出します。この4枚のカードを表向きに持って、この上に、ダブル・フェイス・カードを♦Qが一番上になるように載せます(写真1014)。



写真1014

②この5枚のカードを左手に表向きに持って、左手の親指で一番上の♦Qを右へちょっと押し出します。そして、♦Qの右上隅を右手の親指を下から、人差指・中指を上から当てて、掴みます(写真1015)。このまま、右手親指で♦Qを下から撥ね上げて垂直に立てて観客に示します。同時に左手のパケットも垂直に立てます(写真1016)。

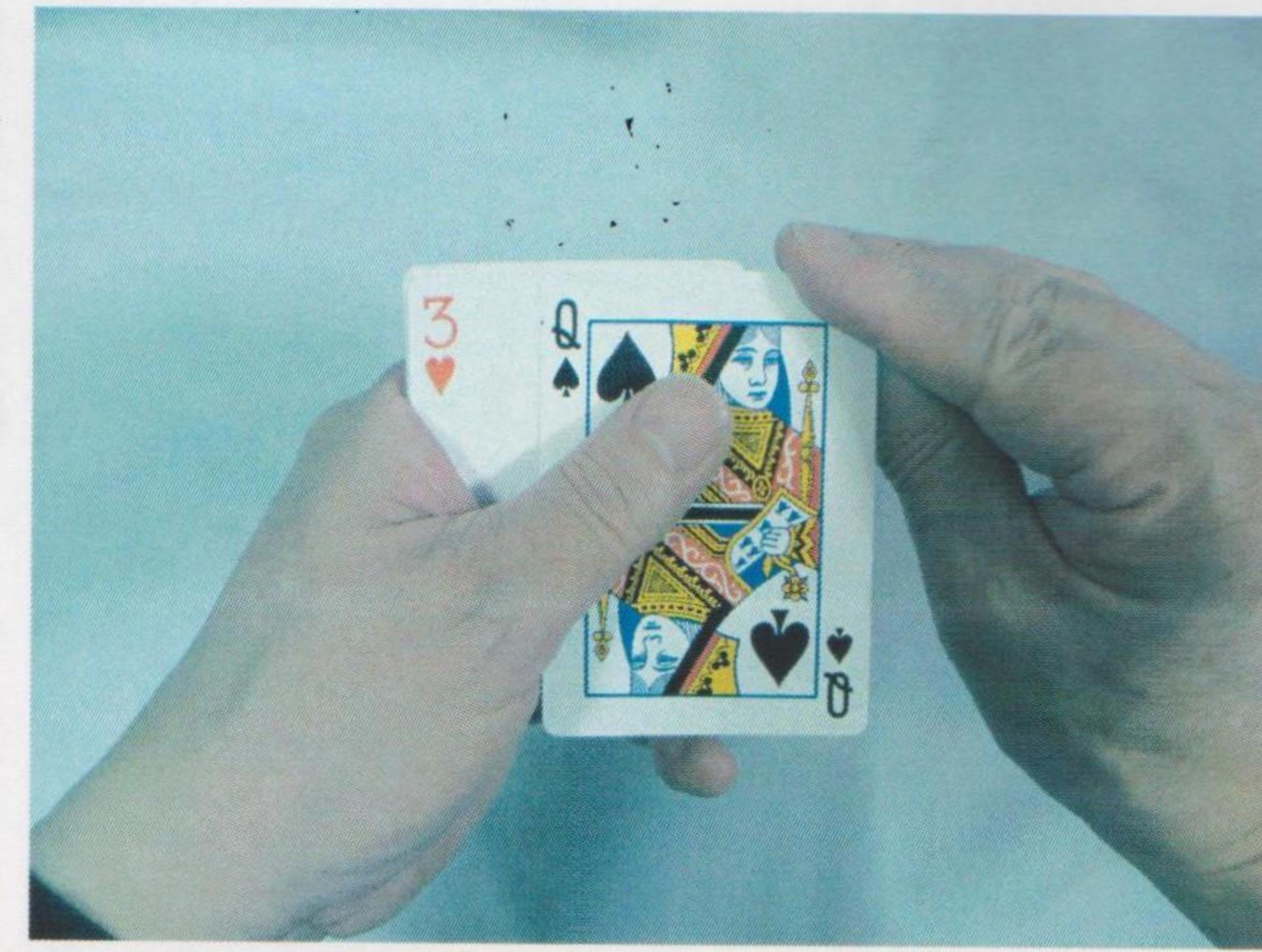


写真1015

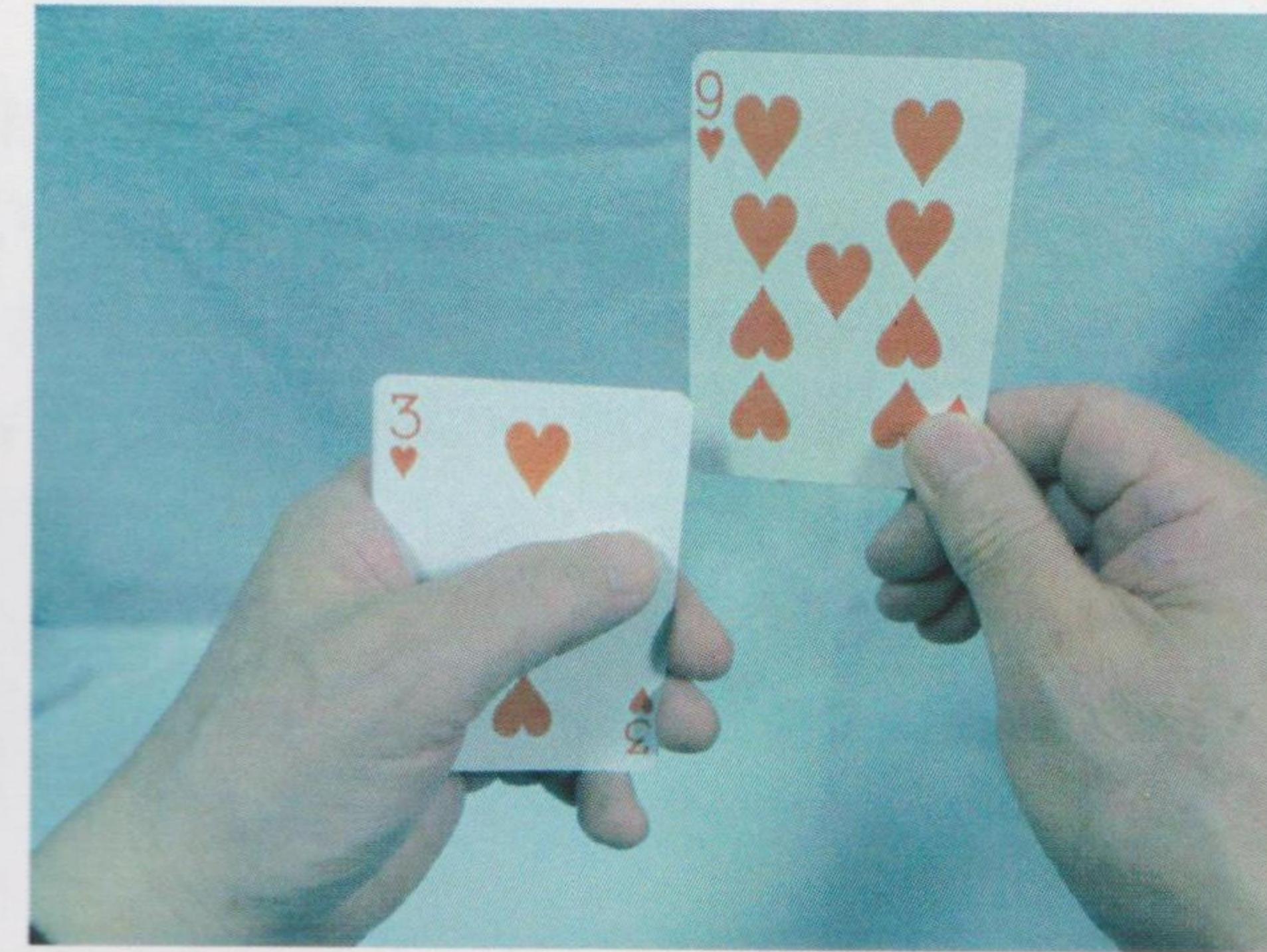


写真1016

- ③このとき、「これが1枚目です」と言って観客に♠Qを示します。この見せ方ですと、♠Qの反対側の♥9は観客の目に触れません。見せた♠Qは、そのまま左手のパケットのボトムに加えます。
  - ④続けて、2枚目、3枚目、のカードも一旦表を見せたあと、順にパケットのボトムに加えて行きます。4枚目、5枚目も同じです。
  - ⑤6枚目になったら、左手のパケットの上には♥9が見えます。これも、公明正大に右手で掴んで観客に示し、裏を見せないで、パケットのボトムに加えます。
  - ⑥これで、パケットの6枚のカード(実際は5枚しかない)をすべて表向きで一枚ずつ示したことになります。
  - ⑦パケットを裏向きで左手に持ります。このまま全体を表向きにして1枚ずつテーブルの上に置くと、カードは5枚しかなくて、しかも♠Qが消えています。
- 以上が、「ダブル・カウント」の原理です。

こんなこと、知っていたよ、と思われる方がいらっしゃるかもしれません。かつ、この原理なら、とっくに使っていた、と言う方もいらっしゃると思います。カードの技法には往々にしてそういうことが

あります。これがオズボーン・カウントとかという名前にしないで、「ダブル・カウント」としたところに好感がもてます。

## 2. 応用

上の原理だとあまりにも単純で、いったいどのように応用するのかと素朴な疑問を覚えます。その疑問に答えます。

### [準備]

デックから普通の♠Qを抜きだして、これに縦方向にブリッジをかけ、デックのトップに置いておきます。一方、♠Q/♡9は、♠Qの面が向くようにしてデックのボトムにセットしておきます。セットしたデックはケースの中に裏向きで入れておきます。

### [やり方]

①ケースを取り上げ左手で持って、右手でフラップを開けて、中のデックを引き出しますが、このとき、ケースを持っている左手の人差指をケースの半円の部分に掛けて、ブリッジされているトップ・カード(♠Q)がケースから出て来ないように押さえます(写真1017)。デックを抜き出したら、ケースは閉じてテーブルの上に置きます。♠Qはケースの中に残ります。



写真1017

②デックをシャッフルしますが、ボトムのダブル・フェイスはそのままの位置に保っておきます。次いで、このボトム・カードを客にフォースします。これは、ヒンズー・シャッフル・フォースがいいでしょう。客は、♠Qを自分のカードとして覚えます。ヒンズー・シャッフル・フォースはすでに標準的な技法ですので、改めて詳述しませんが、最近の本では、ロベルト・ジョッビの「カード・カレッジ」第1巻に解説があります。

③客がカードを覚えたら、デックをひとつにして、シャッフルします。表向きの♡9が見えないように注意してシャッフルします。「これから、何枚かのトランプを一枚ずつ表向きにしてお見せして行きますから、あなたの覚えたトランプがその中にあるかどうか、よく見ていてください」と言いながら、デックを表向きに拡げて、♠Qが上から(ボトムから)7枚目に来るところでデックをカットしま

す(写真1018)。



写真1018

- ④表向きになったデックをテーブル上に置きます。上から6枚のカードを右手で取り上げて左手に置きます。最初のカードをダブル・カウントのときと同じハンドリングで、表向きにして客に見せます。「1枚目」と言います。見せたら、6枚のパケットの下に回します。続いて、2枚目、3枚目と計6枚見せます。客に「あなたのトランプはありましたか？」と訊ねます。客は否定します。見せた6枚のカードは、そのままテーブルの上に重ねて置きます。
- ⑤デックから次の6枚のカードを取り上げるように見せて、実際は5枚のカードを左手に取り上げます。一番上に♦Qがあって、これはダブル・フェイスです。さきほどと同じようにダブル・カウントのハンドリングで客に1枚ずつ見せて行きます。最後は♥9を見せて6枚が完了します。「今度はどうですか？」と訊ねます。客は自分の覚えた♦Qがあったので、「ありました」と答えます。
- ⑥そこで、「確かにあなたのトランプはこの中にありましたね？」と言いつつ、左手のパケットを表向きにひっくり返して、一枚ずつテーブルの上に出して行きます。5枚しかなく、しかも客の覚えたカードがないので、客は驚きます。
- ⑦「あなたの覚えたカードは何でしたか？」と訊きます。客は♦Qと答えますから、テーブルの上に置いてあったカード・ケースを取り上げて左右に振ります。音がします。ケースをゆっくり開けて、中の♦Qをテーブル上に出します。

#### [コメント]

テレビで普通の人を相手に行なうカード・マジックは、実は、これで充分なのではないかと思います。途中で、客のカード♦Qがデックの上に見えるので、後から消えるのが効果的になります。

### 3. フランク・ガルシアが市場で販売した作品

基本的にはポーカーの手札を材料に使うギャンブリング・トリックなのですが、特にギャンブルやポーカーに精通していないても、現象として充分に楽しめる内容になっています。以下の演出のストーリーはフランク・ガルシアのものではなくて、私のカジノ経験に基づいて独自に構築したものです。

す(写真1020)。「彼は、この手札に5000万円近いチップを賭けていました。このストレート・フラッシュに勝てるような手札は、確率的にもきわめて低いと言わねばなりません」。



写真1020

⑤「ところが、ここで不運なことが起こりました。彼は、手札の入れ替えのときに誤ってディーラーから6枚のトランプを受け取っていたのです」と言って、左手のデックの裏向きのトップ・カードを左親指で右横に押し出し、右手のファンの下にその一枚を取る動作をします(写真1021)。実際には、ファンの陰でこの裏向きのトップ・カードはデックに戻してしまいます。



写真1021

⑥表向きのファンを閉じて、右手にビドル・グリップに持ちます。左手のデックはテーブル上に置きます。右手をこの状態から掌が上になるようにひっくり返すと、ボトムの♦Qが見えます(写真1022)。客は、いま、デックから取った余分の1枚が♦Qだったのだと思います。「6枚目の余分なトランプは不幸にして黒の絵札でした。これは、このハートのストレート・フラッシュにはまったく余計なトランプです」と言います。そして、「通常は、このように余分にトランプが配られたときや、あるいは逆にトランプの枚数を少なく配ったときは、もう一度、すべてのトランプをひとつに戻して、シャッフルし直して、新しく配り直すのがルールです。しかし、こんなストレート・フラッシュはもうめったに来ることはありません」と説明します。

訊きました。彼は、右手を左袖に入れると、そこからさきほどの♠Qを取り出したのです。まさにマジシャンも顔負けのテクニックでした」台詞に合わせて、左袖に入れておいた♠Qを右手の指先で取り出します。

#### 4. カード・アクロス

一度数えたカードが消えてなくなるのなら、カード・アクロスには便利な技法です。以下は、Ed Marlo の原案です。

[現象]10枚ずつのカードを客が持ちます。それぞれのパケットの枚数は2回ずつ数えて10枚であることを確認したにもかかわらず、パケットからパケットへ3枚のカードが飛行します。

#### [必要なもの]

6枚のダブル・バック・カードが必要です。また、このダブル・バックと同じ裏模様の普通のデックも一組必要です。

#### [準備]

3枚のダブル・バック・カードをデックのトップから8枚目、9枚目、10枚目にセットしておきます。残りの3枚のダブル・バック・カードは、デックのトップに3枚とも重ねて載せておきます。

#### [やり方]

①デックをフォールス・シャッフルします。デックを一旦左手の上に置いて、このデックを右手で上から持って客に渡しますが、このとき、トップの3枚のダブル・バック・カードを右手にパームします(写真1024:パームしたカードが見えるように撮ってあります)。デックを客に渡しながら、「1枚ずつ数えながら10枚ずつの山を作ってください」と頼みます。



写真1024

②客は、裏向きのまま、まず、10枚の山を作り、次にもうひとつの10枚の山を作ることになります。最初の山は、トップから3枚がダブル・バック・カードです。2番目の山は、すべて普通の10枚の

カードです。カードを配ったら、デックをテーブルの上に置いてもらいます。この間に、マジシャンは、まず、2番目の山を手前に引いて取り上げますが、このとき、右手にパームしていた3枚のダブル・バック・カードをひそかにこの2番目のパケットに加えます(写真1025:加えるカードが見えるように撮ってあります)。加えたら、このパケット全体を表向きにします。

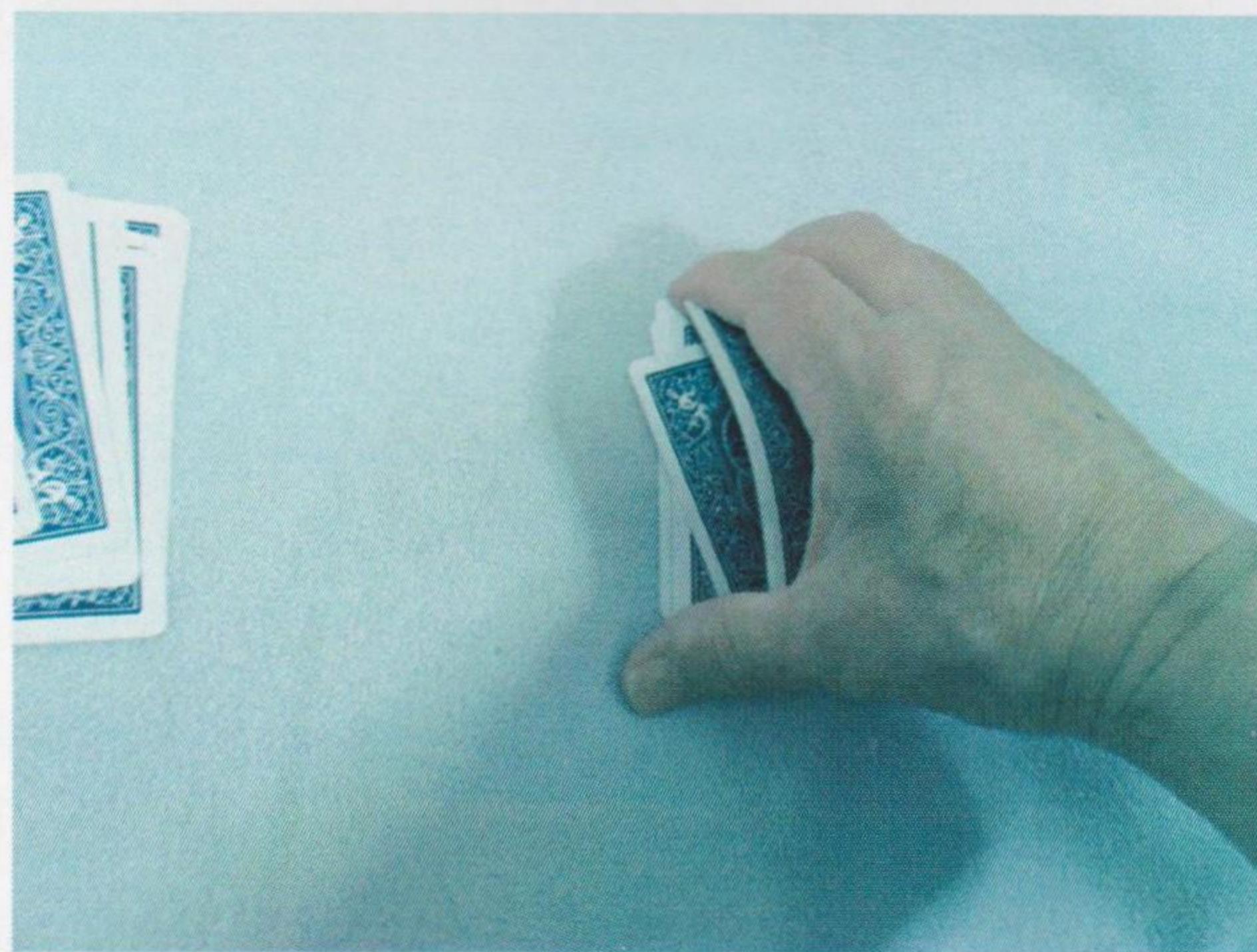


写真1025

- ③「もう一度、それぞれの枚数を再確認しておきましょう」こう言いながら、表向きになったカードを1枚ずつ数えながら裏向きにしてパケットのボトムに回して行きます。これまでのダブル・カウントと同じ要領です。すると、確かに表向きのカードが10枚あるので、これで、この山は確認できることになります。もし、可能なら、このパケット全体をもう一度表向きにして客に渡し、客自身が同じように枚数を数えながら1枚ずつ裏向きにして下へ回すように言うと効果的です。この山は一旦テーブルに置きます。
- ④今度は、最初のパケットを取り上げて、裏向きのまま、テーブルの上に1枚ずつ数え出し、10枚であることを確認します。次に、このパケットを別の客に渡して、もう一度、裏向きのまま、テーブル上に数え出してくれるよう頼みます。ダブル・バック・カードは再び3枚ともトップに来ます。これで2回ずつ枚数を確認しました。
- ⑤最初のパケットから2番目のパケットにカードを3枚飛行させます。こここの部分の演出は、Ed Marlo の解説には特に何も書いてありませんが、二人の客にそれぞれパケットを持たせるなどの典型的なカード・アクロスの演出でもかまいません。飛行させるジェスチャーの後、最初のパケット全体を表向きにして、ダブル・カウントの要領で上から1枚ずつ裏向きにしながらボトムに回して行きます。7枚しかありません。
- ⑥パケット全体を表向きにして、もう一度、ダブル・カウントの数え方で数えますが、やはり7枚です。いま数え終わった7枚のパケット(実際は10枚)は、全体を表向きにして、裏向きに置いてあるデックの上に載せます。これでダブル・バック・カードの処理ができました。
- ⑦客に2番目のパケットを取り上げて、裏向きのまま、マジシャンの左手の上に1枚ずつ数え出してくれるよう言います。客がその通りにすると、カードは全部で13枚あります。3枚のカードが飛行したことになります。

## [オプション]

以上がダブル・カウントを使った「カード・アクロス」ですが、ダブル・カウントによって、カードを消すことはできますが増やすことはできません。そこで、「カード・アクロス」の場合は、増える分の3枚のカードをパームして加えています。原案では、この部分は、パームして加えるとあっさり書いてあって、どうやってやるのか詳しくは書いてありません。Ed Marlo にとっては、3枚のカードをパームして加えることなど造作もないことなので、書いてないと思われますが、普通のマニアにとっては客のすぐ目の前でこれを行なうのはなかなかたいへんな作業です。

そこで、いくつかオプションを提案します。

### (1) 封筒を使う方法

カード・アクロスに封筒を使うのは、珍しいことではありません。10枚を数え終わったパケットをそれぞれ封筒に入れて封をするのです。そのあとで、3枚が飛行します。このうち、7枚に消える方のパケットは10枚から変化がありませんから、受け取る方の10枚を入れる封筒に予め余分な3枚を入れておきます。これは、最初に封筒が空であることを見せねばなりませんから、封筒を二重にしておくか、あるいは、空であることを点検した封筒と3枚余分に入れた封筒とをスイッチするやり方を探ります。

### (2) スリービング

余分の3枚を予め、マジシャンの右袖に入れておいて、客が10枚テーブルに数え出しているときに、袖から手の中に落としてパームします(写真1026)。この場合、3枚ともダブル・バック・カードなので、表とか裏とか気にしないでパームすれば良いので、スリービングも相対的に楽です。



写真1026

### (3) カード・ケースをミスディレクションに使う

3枚のダブル・バック・カードは、上着の右ポケットに入れておきます。ダブル・バックなので、表や裏を気にする必要はありません。最初に、デックをカード・ケースから出して、フォールス・シャツフルしたら、デックを客に渡し、10枚ずつの山を2つ作ってくれるように指示しますが、客にデックを渡してしまったら、何気なくケースを閉じて、上着の右ポケットにしまいます。そして、右手をポケットから出して来るときに、3枚のダブル・バック・カードを右手にパームして来ます。時間は充分に

あります。

### 5. Simon Aronson と Gary Plants

これ、本格的に書くとたいへんです。Jon Racherbaumer の解説は、原典を知っている者にしかわからないような書き方しかしてありませんし、絵は一枚もありませんので、この“UNLIMITED 3.0”だけを手にした人は途方に暮れただろうと思います。もともとは、Ed Marlo のアイデアです。それを Simon Aronson がアレンジして1990年に自著“The Aronson Approach”で発表しました。サイモン・アロンソンの解説は、非常に懇切丁寧でわかりやすいです。写真もふんだんにあります。手品の解説のわかりやすさは、ハリー・ローレインが1番で、カール・ファルヴズが2番で、サイモン・アロンソンが3番でしょうか。ジョン・ラッチャーボーマーやジム・スタインマイヤーは、語彙力があり過ぎて、私にはわかりにくいです。

ところが、サイモン・アロンソンのハンドリングは、ちょっと私とはケミストリーが合わなくて、今回は、それをさらにアレンジした Gary Plants のやり方を採用して全体を再構築しました。

[現象]客が心の中で覚えたカードが、確かにあったパケットから消えて、全く予想しなかった場所から出て来ます。

#### [準備]

♠Q/♥9のダブル・フェイスをデックのトップから13枚目に♠Q が表側になるように挿入しておきます(写真1027)。普通の♠Q をデックのトップに置いておきます。

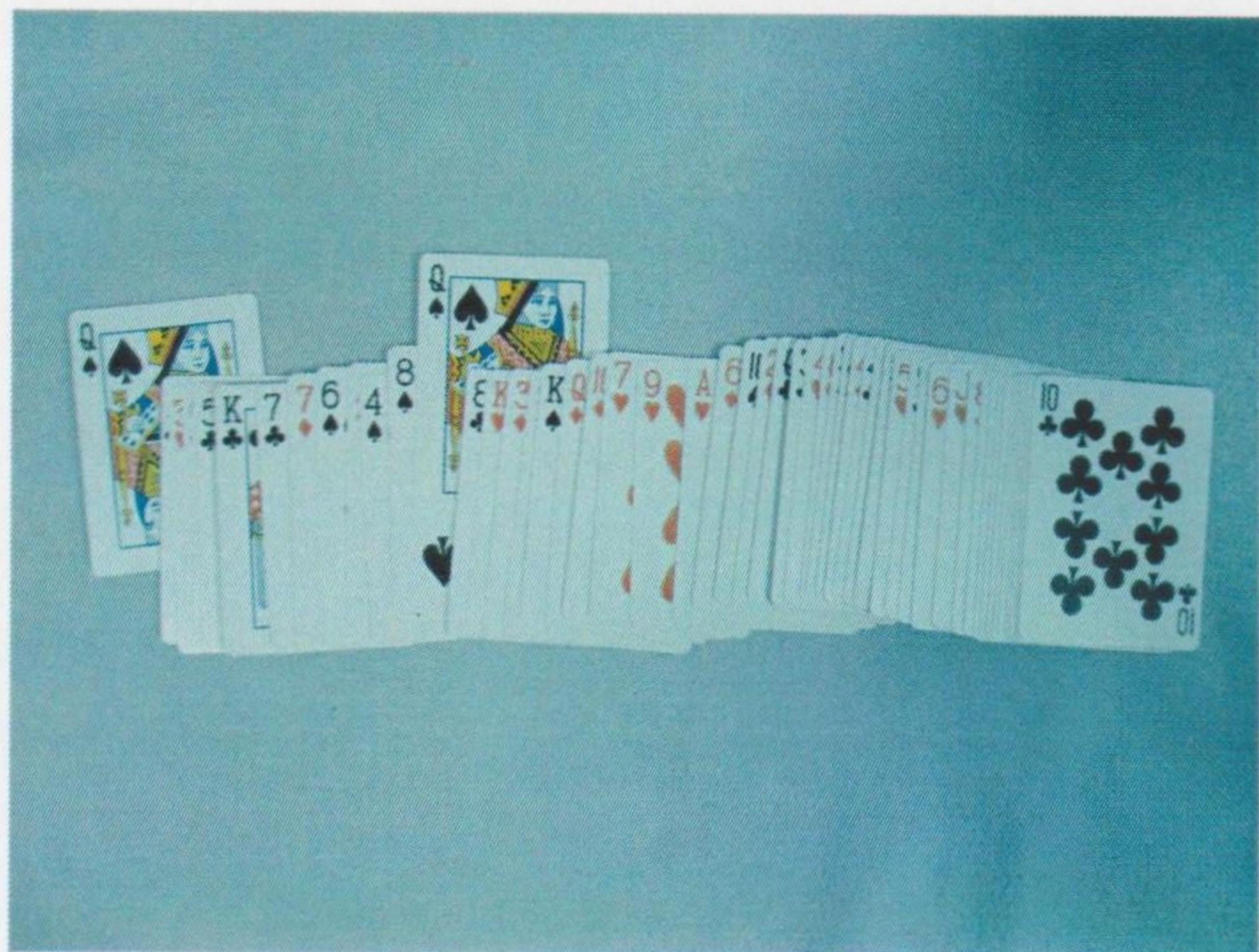


写真1027

#### [やり方]

- ①デックをフォールス・シャッフルします。ダブル・フェイス・カードが見えないように注意します。デックは裏向きにテーブルの上に置きます。客に、「1から10までの間でお好きな数をひとつ心の中で思い浮かべてください」と言います。
- ②客が思い浮かべたと言ったら、「それでは、私が背中を向けていますから、その間に、思った数字の数だけ、裏向きのまま1枚ずつランプを取って、ポケットなどの見えないところに入れてく

ださい」と頼みます。マジシャンは客に背中を向けて、客が作業を終えるのを待ちます。客が終わったと言ったら向き直ります。

- ③「私には、あなたが、何枚取ったかもちろんわかりません」と言いながら、デックを左手に持ち、表側を客に向けて、「実はあなたに選んだもらった数字は時刻だったのです。そこで、時刻を表す12枚のトランプを使います」と言いつつ、トップから、3枚ずつ、カードの順序を変えずに合計4回、12枚のカードを客に表を向けながら数えます。数えたら、デックを裏向きに戻して、あたかも、いま数えた12枚のカードを揃えて取り上げるような仕草で、実際は、最後の1枚をデックに戻して11枚だけを取り上げます。デックはテーブル上に置き戻します。
- ④「それでは、これから、各時刻のトランプをお見せして行きますから、ご自分が選んだ時刻の場所のトランプをよく覚えてください」と言いながら、何気なくトップ・カードを1枚ボトムに回します。次いで、11枚のパケットを表向きにして、右手にビドル・グリップに持ります。
- ⑤この時点でマジシャンには客の選んだ時刻が何時であるかはわかりませんが、ここで、仮に客の選んだ時刻が4時であったとすると、表向きのパケットの中のダブル・フェイスの♠Qが上から4枚目に来ているはずです。もちろん、ここで客の選んだ時刻がわかつても黙っています。
- ⑥「まず1時のトランプです」と言って、右手のビドル・グリップの一番上のカードを左手の親指で引いて左手に取ります。客が認識したら、右手のカードでこの左手に取ったカードを裏向きにひっくり返します(写真1028)。同時に左手を垂直に立てます。

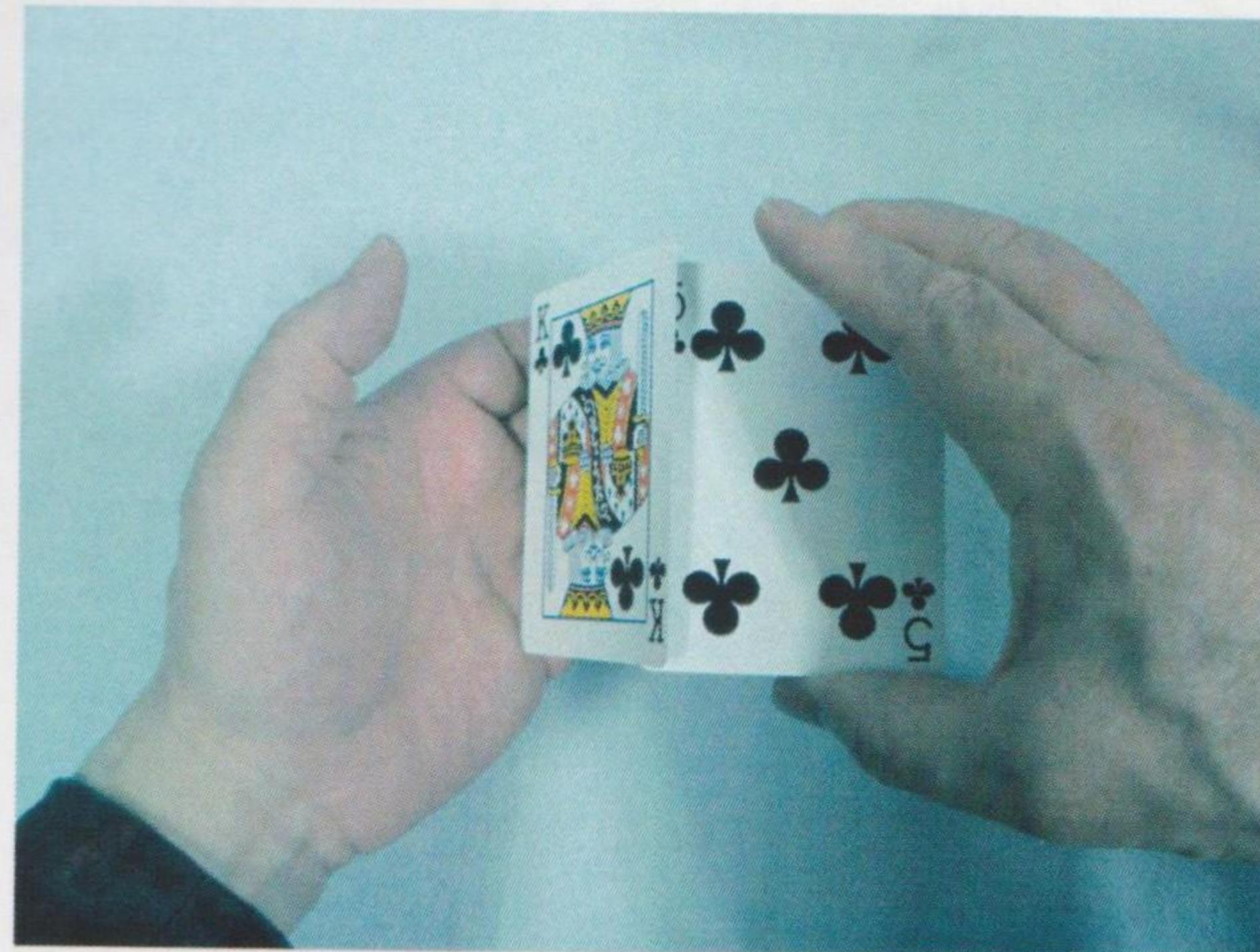


写真1028

- ⑦再び、両手を下に降ろして、右手のビドル・グリップから2枚目のカードを左手に引きます。「これが2時のトランプです」と言います。見せながら、裏向きにして左手は垂直に立てます。
- ⑧3枚目のカードも同様に行ないます。4枚目に来たら、♠Qですから、これが客の選んだ時刻のカードです。♠Qを左手に引いて、♥9が客に見えないようにひっくり返しながら左手を垂直に立てます。かつ、いま左手に取った♠Q/♥9の下に左小指でブレイクを作ります。左手を元に戻しながら、♥9が見えないように直ちに右手のパケットを重ねて、次の5枚目のカードを左手に引きますが、このとき同時に、小指のブレイクから上の♥9を右手のビドル・グリップのパケットの下に取つてしまします(写真1029)。ここが、この手品で一番難しい箇所です。



写真1029

⑨残りの6枚目、7枚目、……と同様に左手に引いて裏向きにして行きます。最後の12枚目に来たら、♥9が見えていますから、「これが12時のトランプです」と言って、左手に引き、ひっくり返しながら左手を垂直に立てます。これで、1時～12時までのすべてのカードを見せましたので、客は、自分の選んだ4時の場所にあった♠Qを覚えたはずです。

⑩ただちに、左手を甲が上になるようにして、パケットを表向きにテーブル上に出します。「あなたの選んだ時間のカードは何でしたか？」と訊きます。客が♠Qと答えますので、テーブル上のカードが11枚しかなく、客のカードが消えていることを示します(写真1030)。

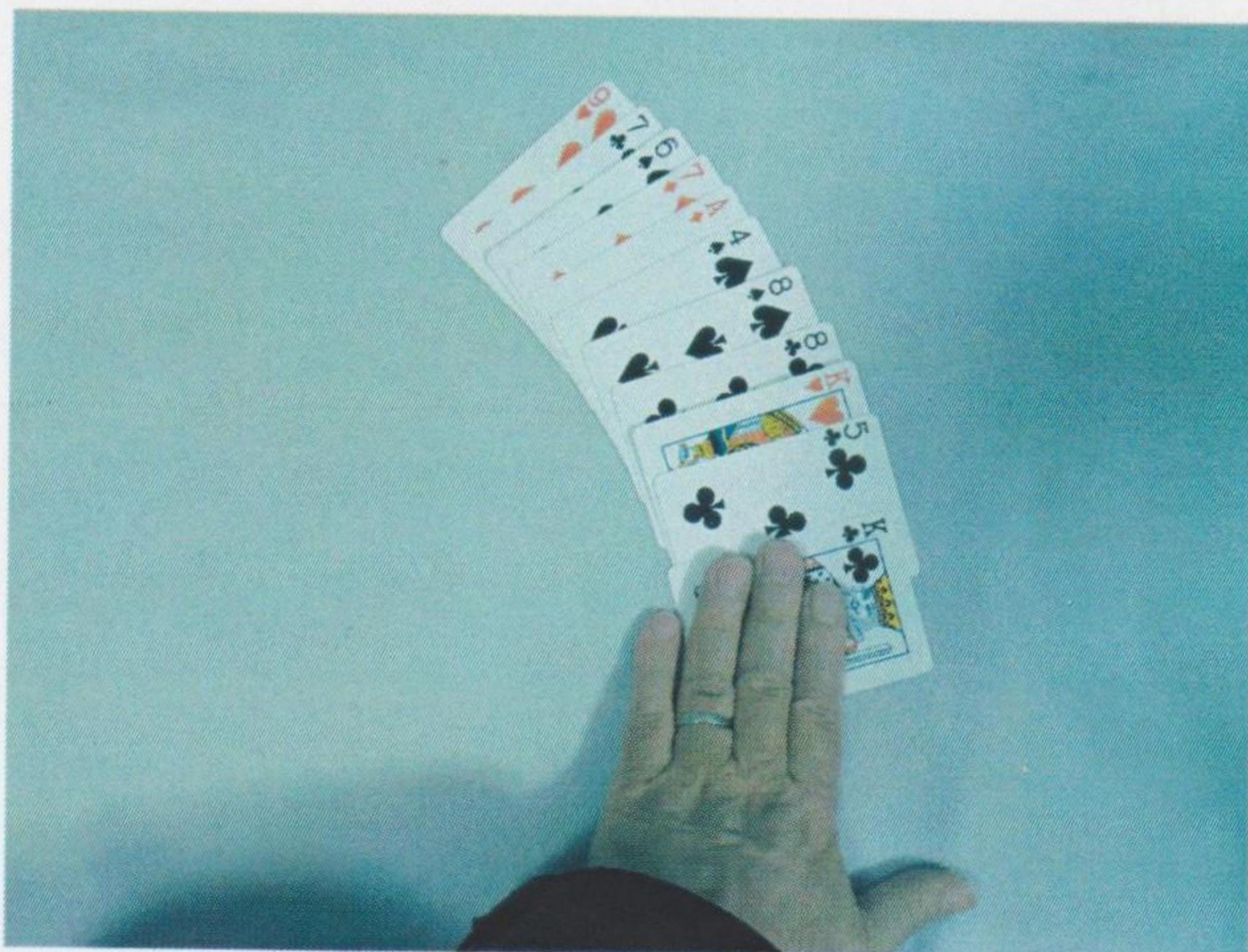


写真1030

⑪最後に、さきほど最初に客がデックから取ってポケットに入れたカードを出してもらいます。客にそのカードを点検してもらうと、♠Qが含まれています。二重の驚きです。

これは、aficionado の Vol.6-No.8 です。

郵便の送付先: 〒145-0061 東京都大田区石川町2-33-1-904 マスカレイド

Eメール・アドレス: [masqpart4@aol.com](mailto:masqpart4@aol.com)

これは、限定100部のうちの08／100です。

(2022年10月)